

第5節 古代以降の調査

1 溝

SD2 (第134・135図、PL.107・118)

調査区の中央付近、C8・D8・E7・E8・F7・G7グリッドにあり、標高72.3～73.7mの丘陵上に位置する。Ⅱ層除去後のⅢ層中で検出したが、大部分がⅡ層中に掘り込まれていたと推定でき、底部付近の一部のみを検出できた。すぐ西側にはSB2があるほか、北側部分ではSB5と重複しP3を壊している。

ほぼ南北に延びる溝であり、北側は調査区外まで延びている。途中で一度途切れるが実際は連続するものと推定する。長さは36.4m以上で、幅は28～52cmを測る。断面は逆台形状を呈し、検出面からの深さは6～14cm程度となる。主軸方向は中央より北側でやや西方向に折れ、全体でN-3～5°-Wとなる。埋土は黒褐色土の単層である。

遺物は埋土中から土器小片のほか、須恵器の壺(148)が出土した。148は平底で、丸みをもつ肩部がやや張り、短い頸部が付くと推定できるもので、奈良時代末頃に比定できる。

確実な遺構の時期は不明であるが、1の須恵器の年代から、古代以降に埋没した溝と考える。

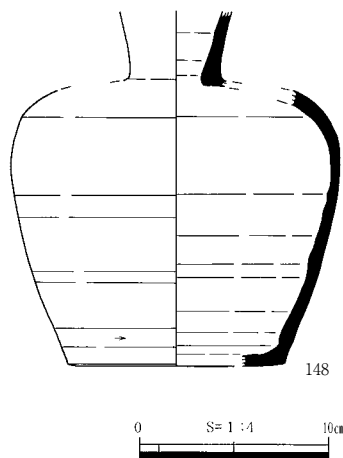
どのような用途の溝であったのかは不明である。

SD3 (第136図、PL.107)

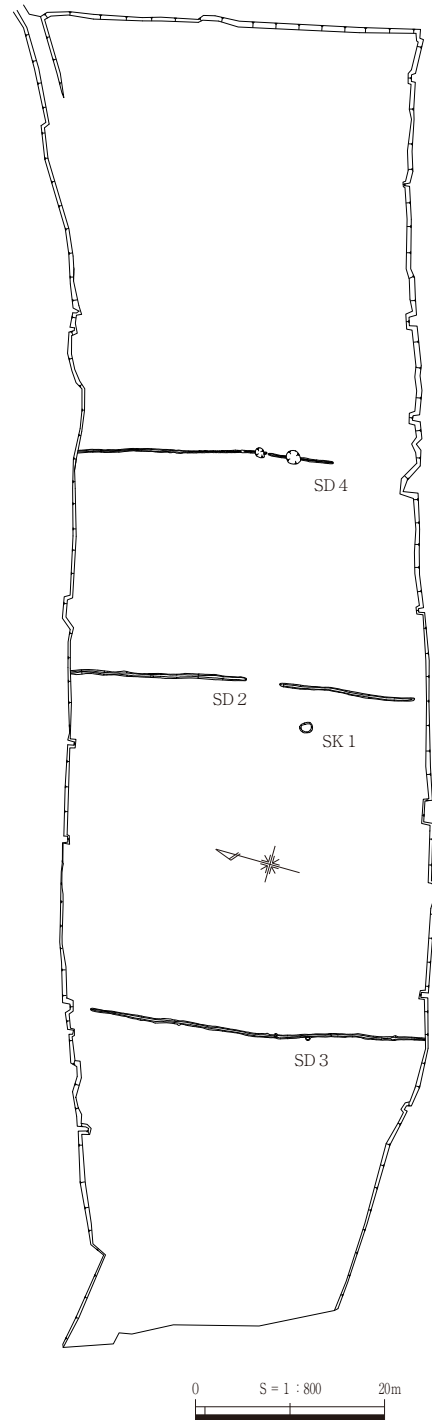
調査区の西寄り、D11・E11・F11・G11グリッドにあり、標高72.2～74.0mの緩斜面上に位置する。

Ⅱ層除去後のⅢ層中で検出したが、大部分が黒褐色土中に掘り込まれていたと推定でき、底部付近の一部のみを検出できた。すぐ西側にはSI3があり、中央より南寄りでSK8を壊している。

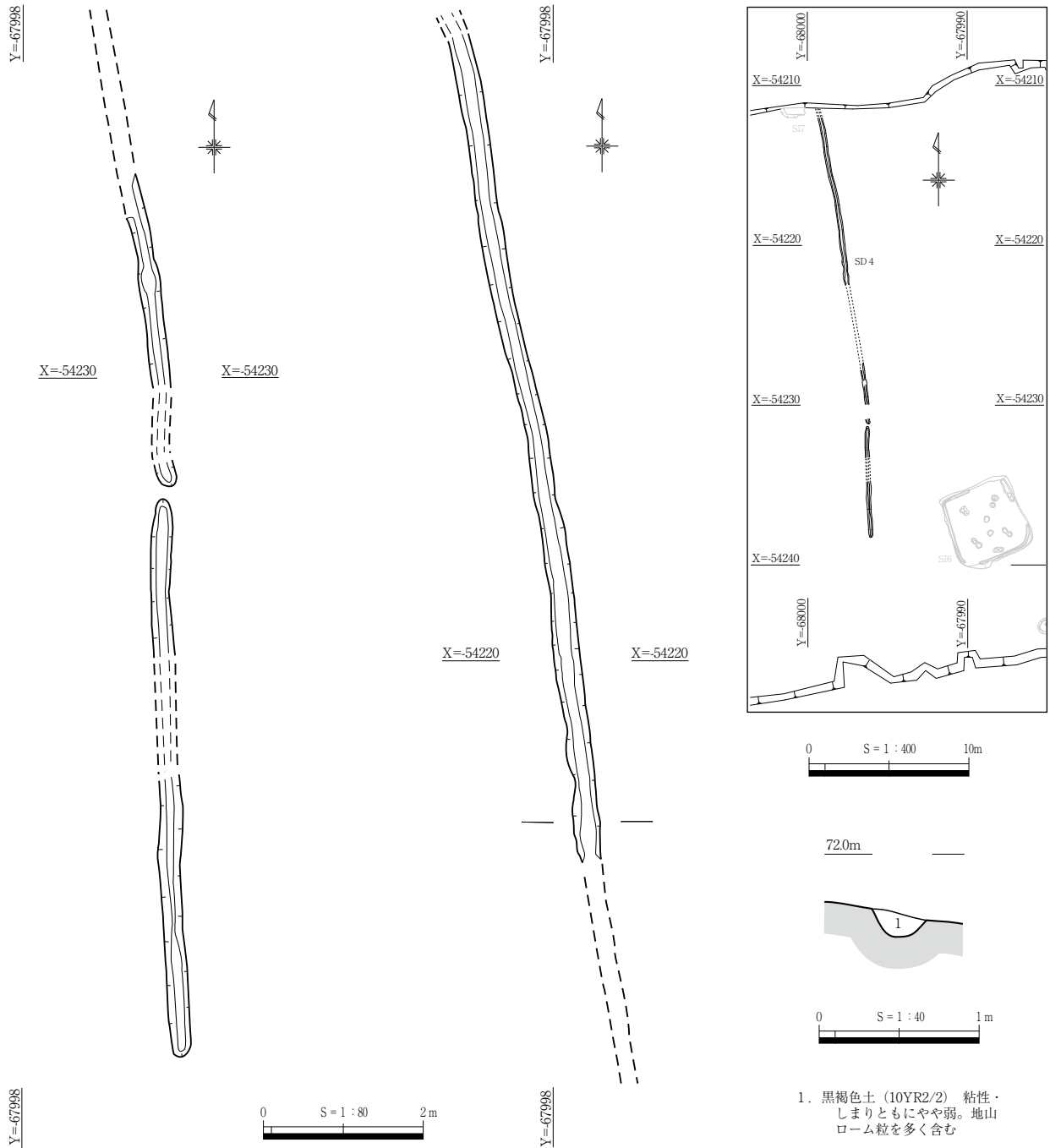
ほぼ南北に延びる溝あり、南側は調査区外ま



第134図 SD2出土遺物



第133図 古代以降の遺構分布



第137図 SD4

で延び、北側も調査区外に及ぶと推定する。長さは35.6m以上で、幅は24～48cmを測る。断面は逆台形状を呈し、検出面からの深さは9～25cm程度となる。主軸方向は北側部分でほぼ南北方向であるが、中央付近より南側でやや東方向に折れ、N-8°-Wとなる。埋土は黒褐色土の単層である。

埋土中から土器が少量出土したが、小片のため図化しなかった。

確実な時期を判断できる遺物が出土しなかったため、遺構の時期は不明であるが、SD2と類似する形態的特徴や埋土の状況から、古代以降に埋没した溝と考える。

SD4 (第137図、PL.107)

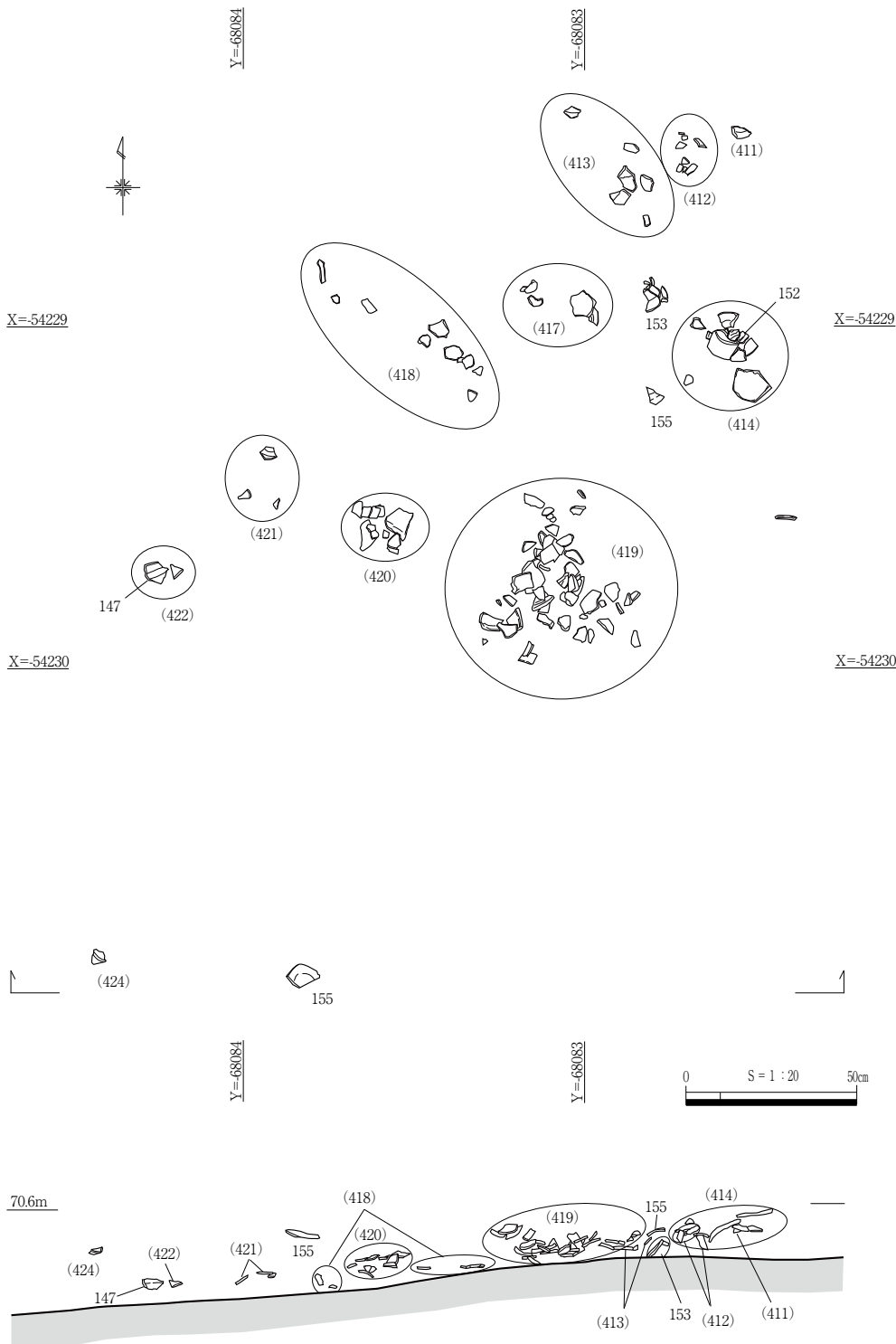
調査区の東寄り、C5・D5・E5グリッドにあり、標高71.3～72.2mの緩斜面上に位置する。II

層除去後のⅢ層中で検出したが、大部分がⅡ層中に掘り込まれていたと推定でき、底部付近の一部のみを検出できた。南端付近のすぐ東側にはSI6があり、北側部分でSI7と重複している。

ほぼ南北に延びる溝であり、北側は調査区外まで延びている。長さは27.0m以上で、幅は20～35cmを測る。断面は逆台形状を呈し、検出面からの深さは16cm程度となる。主軸方向は南側部分でほぼ南北方向であるが、北側でやや西方向に折れ、N-9°-Wとなる。埋土は黒褐色土の単層である。

埋土中から土器が少量出土したが、小片のため図化しなかった。

確実な時期を判断できる遺物が出土しなかったため、遺構の時期は不明である



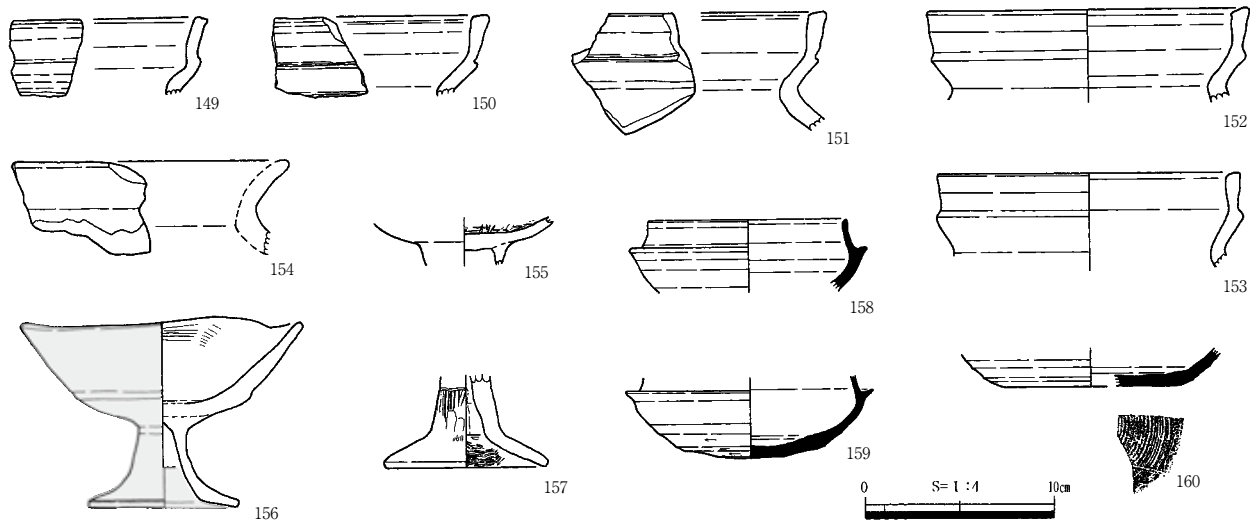
※数字は、本報告における遺物番号。(数字)は取り上げ番号。

第138図 土器溜まり

が、SD2と類似する形態的特徴や埋土の状況から、古代以降に埋没した溝と考える。

2 土器溜まり(第138・139図、PL.107・119)

調査区の北西隅付近の北壁沿い、D14・E14グリッドにあり、標高70.5mの丘陵緩傾斜面からやや急に変化する傾斜変換点付近に位置する。西Ⅲ層中で検出した。南東約10mの地点にSI4がある。

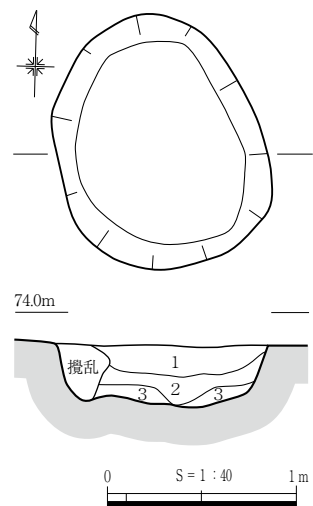


第139図 土器溜まり出土遺物

およそ3m四方の範囲で、土器が溜まっていた。図化した遺物は、149～157が土師器で、158～160が須恵器である。そのうち、149～153が複合口縁甕、154がくの字状口縁甕のそれぞれ口縁部片であり、155～157が高坏である。158～160は坏身で、160は平底の底部に回転糸切り痕をもつ。

遺物の時期は、149～153の複合口縁甕および156の高坏は天神川Ⅸ期併行、158・159はTK23～TK47型式併行期であり、154と160は奈良時代に位置づけられる。

これらから、他の遺構と同様、古墳時代後期前葉を主体とするが、奈良時代に比定できる遺物も含まれることから、SI 4 西側の破壊などと時期を同じくして、後世に攪乱された土器がかき集められたものとする。



1. 褐灰色土 (10YR4/1) と黄橙色土 (7.5YR7/8) の混濁土。粘性・しまりなし。炭・焼土・黒色土を斑状に含む
2. 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性・しまりなし。一部黒色土を含む
3. にぶい黄橙色土 (10YR7/4) と褐灰色土 (10YR5/1) の混濁土。粘性・しまりあり

第140図 SK 1

3 土坑

SK 1 (第140図、PL.107)

調査区の中央付近、E8・F8グリッドにあり、標高73.8m付近の丘陵上平坦面に位置する。Ⅱb層中で検出した。平面は楕円形を呈し、規模は長軸1.35m、短軸1.09mを測る。断面は逆台形状を呈し、検出面からの深さは最深部で30cmである。

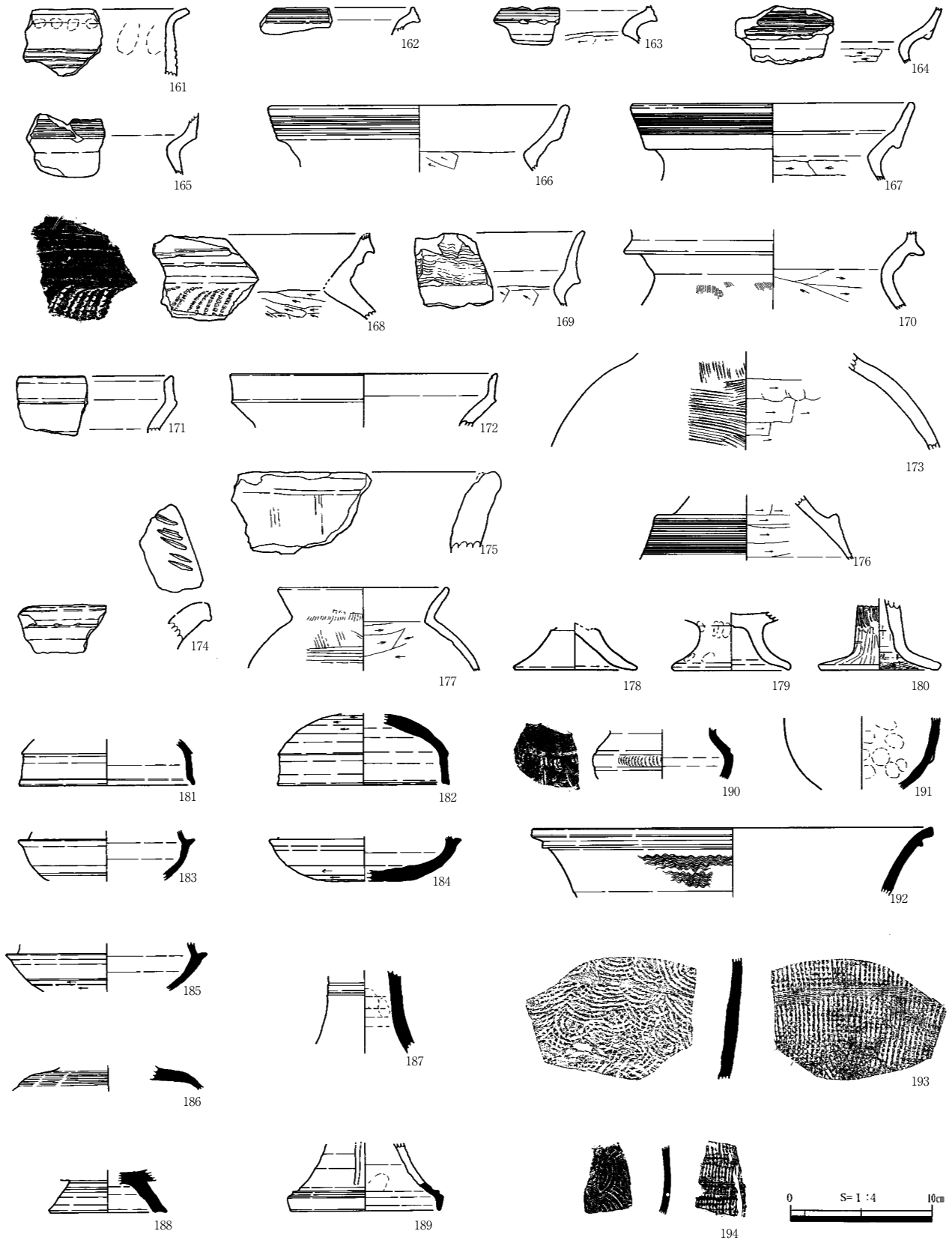
埋土は褐灰色土を主体とする3層に分層でき、1層では炭や焼土を含んでいた。皿状に堆積することから、自然堆積と考える。

遺物は土師器片を1点確認したが、小片のため実測図化は行っていない。

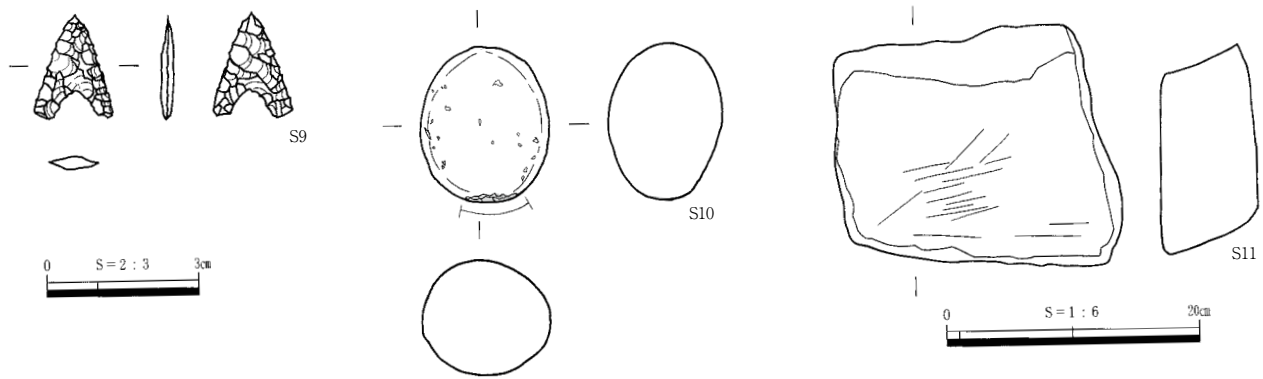
遺構の時期、性格ともに不明である。

第 6 節 包含層出土遺物

1 II a 層出土遺物(第141・142圖、PL.119・120・126・127)



第141圖 II a 層出土遺物(1)



第142図 II a層出土遺物(2)

161～170・176は弥生土器である。161～169は甕である。161は、口唇部が「く」字状に外側に折れるもので、口縁部の下方に3条以上の沈線を入れる。162・163・168は、口唇部が断面三角形を呈し、凹線文を施すもので、168は胴部に貝殻腹縁による連続刺突文がみられる。164～167・169は、複合口縁に沈線文が入るものである。170は複合口縁の接合部の段が突出する。176は器台の脚部で、沈線文が入る。時期は、161が清水編年のI-1～2様式、すなわち弥生時代前期、162・163・168がIV-3様式、すなわち弥生時代中期後葉、164～167・169・176がV-2～3様式、すなわち弥生時代後期中葉～後葉、170がVI-2様式、すなわち弥生時代終末期にそれぞれ比定できる。

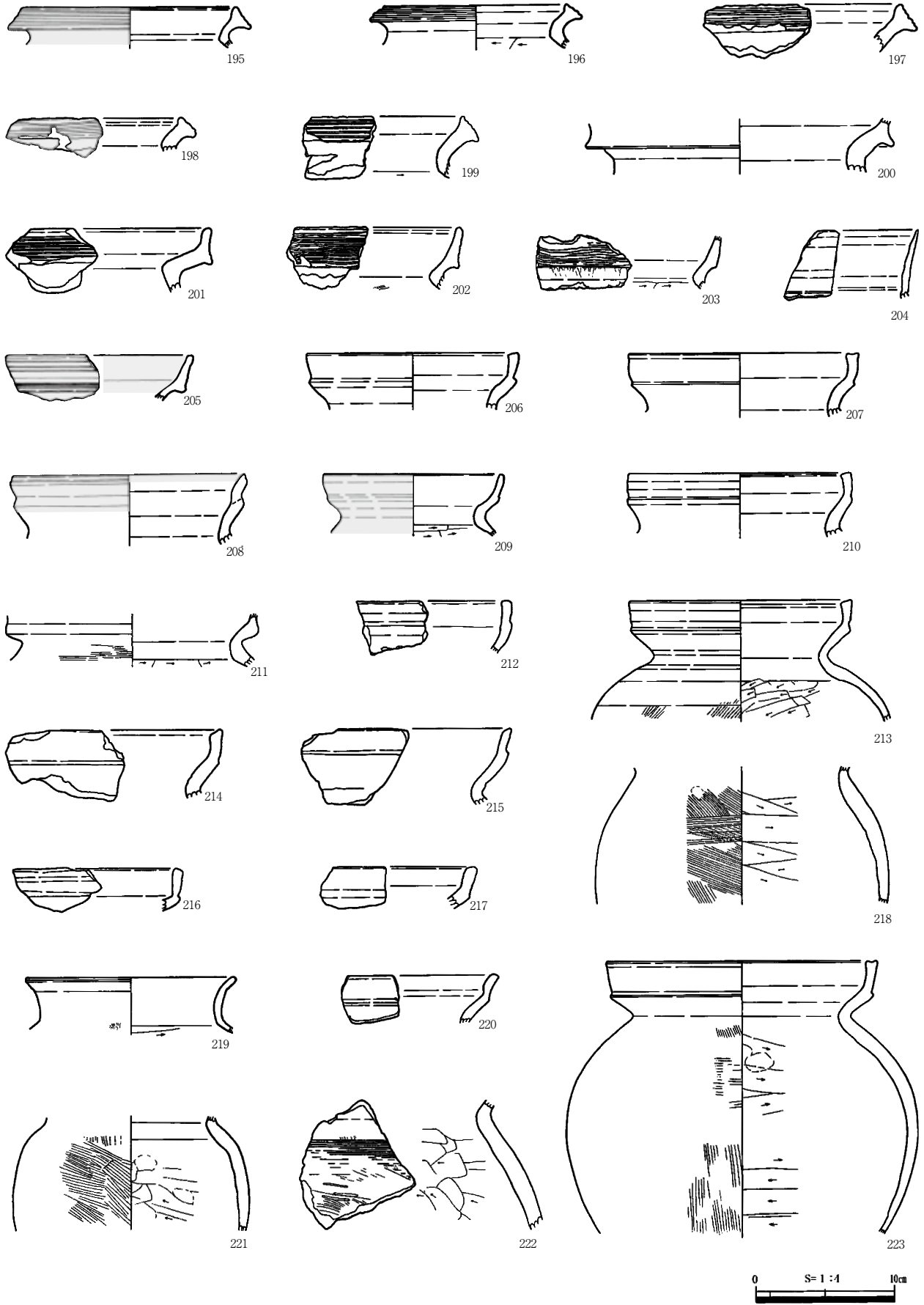
171～175・177～180は土師器である。171～175・177は甕である。171・172は、複合口縁甕の口頸部片で、複合口縁の接合部に弱い段がつき、口縁部が直立またはやや外傾する。173は胴部片で、174・175は大型甕の口縁部片であり、174は内面端部に接合痕を残すことから、複合口縁と考える。177は口縁部がくの字状に折れる甕である。178は脚付碗、179・180は高坏のそれぞれ脚部片である。時期は、171～175・178～180が天神川Ⅸ～Ⅹ期併行、すなわち古墳時代後期前葉～中葉と考える。

181～194は須恵器である。181・182が坏蓋、183～185が坏身である。186は壺の胴部上半で、カキメ調整を施す。187～189は高坏の脚部である。188は短脚でハの字状に開き、端部を水平につくるもので、189は端部が下方に折れ、長方形透かしを入れる。190は甕の胴部片で、胴部中央に2条の沈線を入れ、その間に櫛描文を廻らせる。191は壺の胴部下半の破片である。192～194は甕で、192が口頸部、193・194が胴部片である。192は口唇部の下方に突帯が廻り、頸部全体に波状文が施される。193は外面に擬格子タタキ、内面に同心円状の当て具痕を残し、194は外面に平行タタキ、内面に同心円状の当て具痕を残す。時期は、いずれも陶邑編年のTK23～TK47型式併行期、すなわち古墳時代後期前葉と考える。

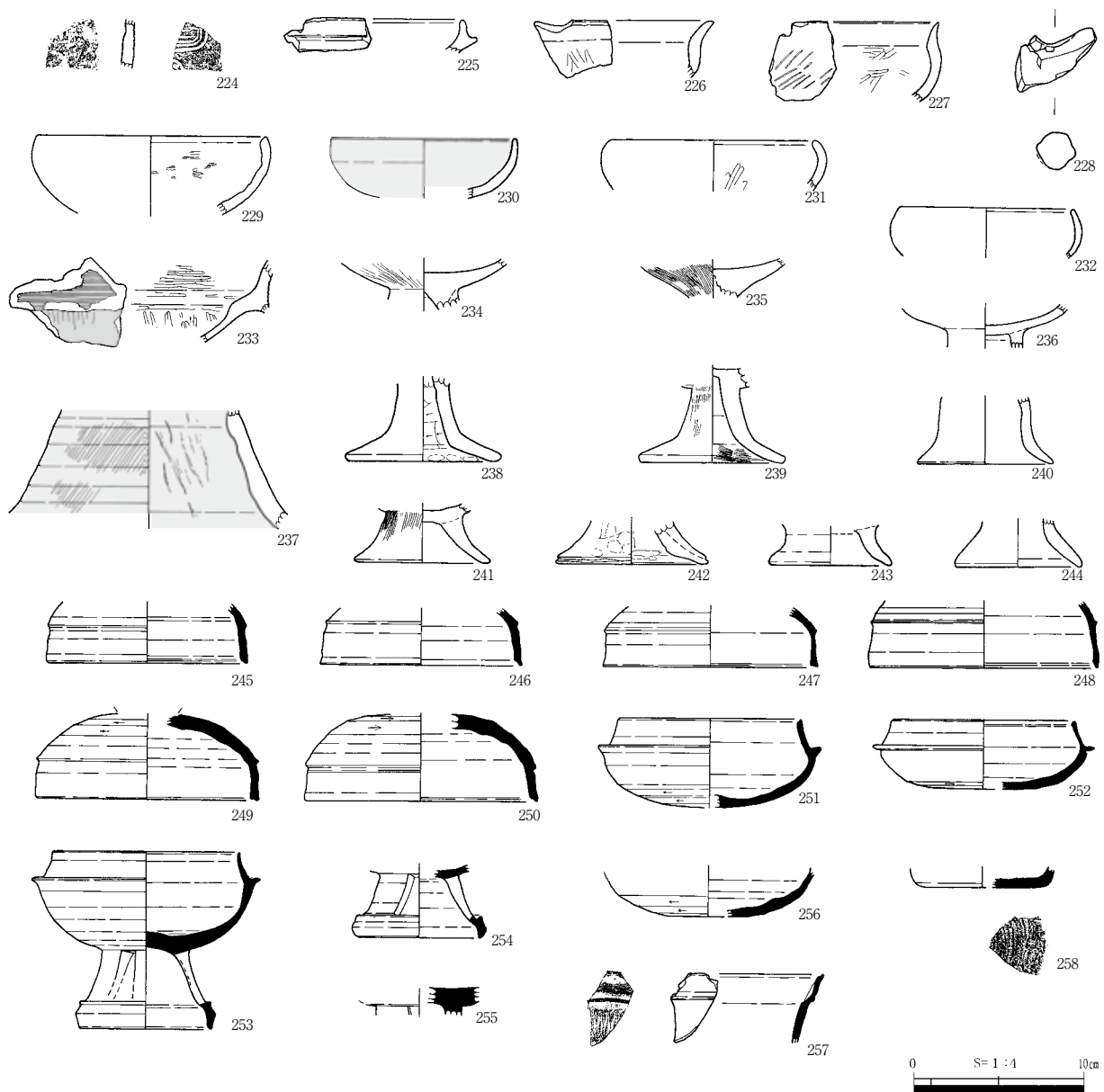
S9は黒曜石製の石鏃で、凹基式である。S10は角閃石安山岩製の敲石で、狭端部の一方に敲打痕を残す。S11は安山岩製の砥石で、表面に擦痕を残す。

2 II b層出土遺物(第143～145図、PL.121・122・125～127)

195～203・205は弥生土器の甕の口縁部である。195～199は口唇部の断面が三角形状を呈し、凹線文が数条入る。200～203・205は複合口縁甕で、201～203・205は口縁部に沈線文を施す。200は、複合口縁の接合部が突出するものである。時期は、195～199が清水編年のIV-3様式、すなわち弥生時代中期後葉、201～203・205がV-3様式、すなわち弥生時代後期後葉、200がVI-2様式、す



第143圖 II b層出土遺物(1)

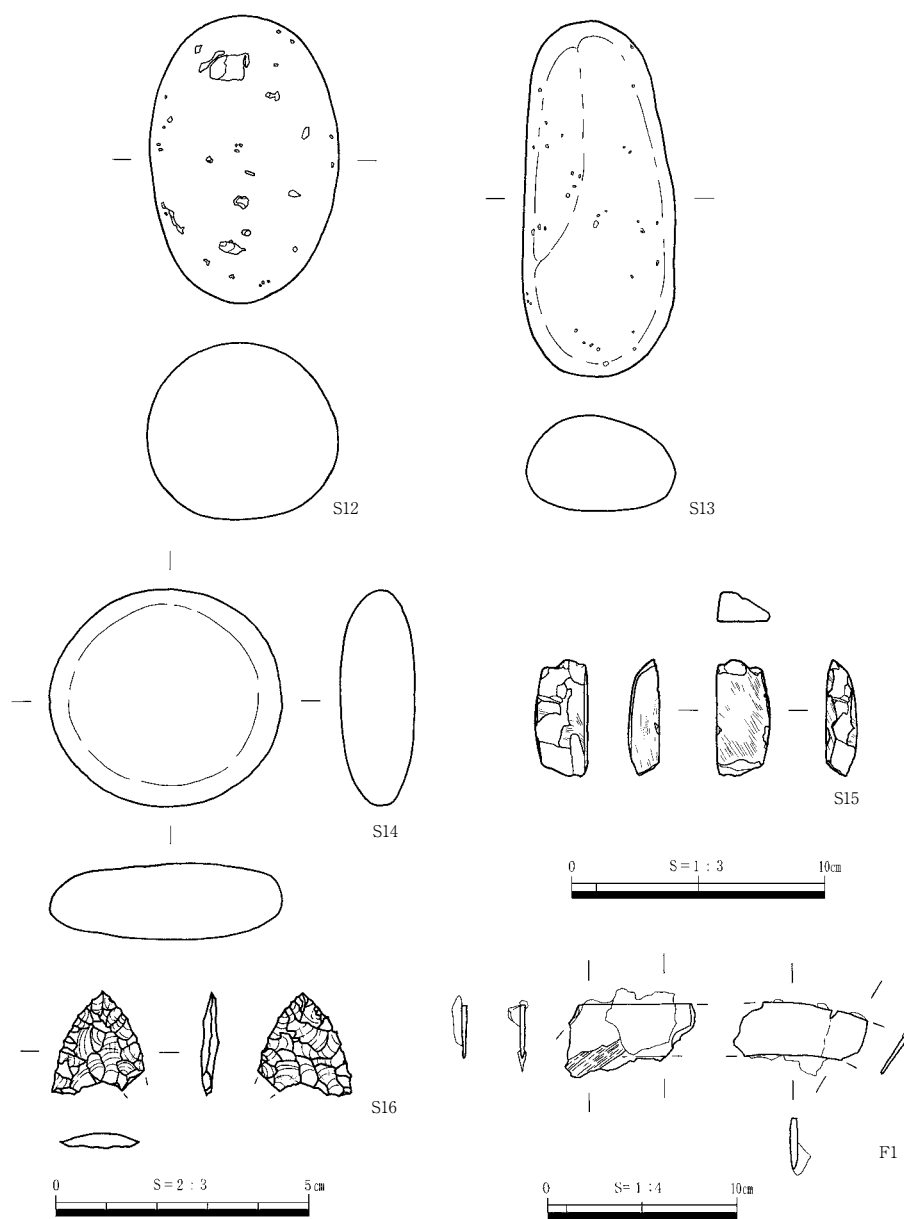


第144図 II b層出土遺物(2)

なわち弥生時代終末期とそれぞれ考える。

206～223は土師器の甕である。206～217・220・223は複合口縁甕であり、口縁部形態から、口唇部を平坦に面取りするもの(206・207・223)、口唇部を内傾するように面取りするもの(213・214)、口唇部が丸みをもつもの(212・216・217・220)、口唇部を緩く尖らせるもの(208・209・215)の4種類に分けられる。複合口縁の接合部は、沈線およびやや段をつくるものがほとんどだが、211は丸く仕上げ、217・220はゆるく折り、口縁部を外傾させている。219は頸部が直立し、口縁部が外傾する。218・221・222は胴部片で、いずれも外面をハケメ調整、内面をケズリ調整する。204は、複合口縁壺または甕の口縁部である。時期は、204が天神川Ⅰ期併行、すなわち古墳時代前期初頭、206～217・220・223が天神川Ⅷ～Ⅹ期併行、すなわち古墳時代中期後葉～後期中葉と考える。

224は縄文土器の浅鉢または深鉢の胴部片であり、外面に沈線文を入れる。北白川C式、すなわち縄文時代中期末と考える。233は弥生土器の器台の口縁部であり、口縁部に沈線文が入る。時期は弥



第145図 II b層出土遺物(3)

生時代後期と考える。

226 ~ 232・234 ~ 244は土師器である。226・227は口縁部が外反するタイプの埴である。228は、甑などの把手と考える。229 ~ 232は埴または脚付埴であり、丸底になるものである。234 ~ 236は高埴の埴部~脚部、238 ~ 240は高埴の脚部である。237は器台であり、外面をハケメ調整する。241 ~ 244は脚付埴の脚台部である。時期は、天神川Ⅷ~Ⅸ期併行、すなわち古墳時代中期~後期と考える。

245 ~ 258は須恵器である。245 ~ 248・250は埴蓋であり、天井部と口縁部の境に段をもち、口唇部を面取りする。251・252・256は埴身であり、251

と252は立ち上がりが高く内傾する。249は有蓋高埴の蓋で、つまみは欠損する。253は有蓋高埴で、埴部は立ちあがりが高く内傾し、脚端部が下方に折れ、長方形一段透かしが3方向に入ると推定する。254・255は高埴の脚部で、254は長方形一段透かしが4方向に入ると推定する。257は甕の口頸部片で、頸部に波状文を入れる。258は埴底部で、回転糸切りをおこなう。時期は、245 ~ 257が陶邑編年のTK23 ~ TK47型式併行期、すなわち古墳時代中期後葉~後期前葉、258は奈良時代と考える。

225は土師質土器の羽釜の口縁部~把手片と考える。

S12 ~ S14は磨石または敲石で、いずれも角閃石安山岩製である。S16は黒曜石製の石鏃で、凹基式である。S15は細粒花崗岩製の砥石で、全面に擦痕がみられる。

F1は、鉄製の曲刃鎌である。鍛造で、基部にわずかに木質を残す。